鋼鉄の玉　*Balls of Steel by Dignan*

ジョンはベッドに座り、二人の女友達であるキャシーとステイシーとともに、テレビを見ていた。彼は一日中、女たちの買い物に付き合わされて、くたくただった。

キャシーとステイシーが、買ったばかりのスカートを拡げてお喋りしている間、ジョンが突然、笑いだした。ちょうどテレビ画面では、若い女性が股間けの一蹴りで男をダウンさせていた。空手道場のコマーシャルだった。

二人の女たちはむっとした表情でジョンを見た。ジョンは弁解した。

「いや、君たちを笑ったわけじゃない。コマーシャルがあまりにもくだらなかったから笑ったんだ」

キャシーはステイシーに、意味ありげな微笑を向けた。ジョンはそれに気づかず立ち上がった。

「飲み物をとってくる。なにかほしい？」

ステイシーは「いえ、けっこう」と答え、キャシーは「私もいらない」と可愛らしく答えた。

ジョンが台所に消えたあと、ステイシーはキャシーに訊ねた。

「また、やるの？」

キャシーはうなずき、邪悪な微笑みを浮かべた。

「彼、絶対にのってくるはずよ」

ステイシーがうなずいた。
「彼が七人目ってわけね」
ジョンが飲み物をもって戻ってきた。そして、「まだ、怒ってるの？」と言い、説明をはじめた。
「だいたいね、股間を蹴っただけで男をやっつけられるって考えが間違ってるよ。物理的に女が男に勝てるはずがないんだ。誓っていうけど、ぼくなら絶対に、女に玉を蹴られたくらいで倒れたりはしない。ぼくの玉は、鋼鉄製だからね」
少女たちは、互いに視線を合わせて笑った。
キャシーが無邪気な声で言った。
「じゃあさ、ジョン、賭をしない？」
ジョンはなにも考えずに即答した。
「いいとも」
「たぶん、あなたの負けよ」
キャシーは微笑んだ。
「あなたの玉を蹴らせてくれないかな。もし一分間蹴られても、倒れるそぶりも見せなかったら、あなたの勝ちよ。今夜はひとばんじゅう、私とステイシーでお相手するわ」
「いいね」

ジョンはにたにた笑った。
「ただし……」
キャシーはつづけた。
「あなたが負けたら、四万ドルもらう。どう？」
ジョンはすでに、ステイシーを抱いている自分を想像して興奮しまくっていた。彼のペニスは岩のように固くなっていた。
「いいとも、やろう、やろう！」
彼はズボンとパンツを脱ぎ、目隠しをして、脚を広げて、キャシーのキックを待った。その威力のなさを思い切り笑ってやるつもりだった。
キャシーは、ジョンから十二フィートばかり離れてたち、二つの睾丸を狙いすましてダッシュした。
「ハイアアア！」
キャシーは、爪先に金属を仕込んだブーツをはいていた。鋼鉄の爪先が、ジョンの睾丸を蹴り潰し、ついでに陰嚢の真上の尿道を押しつぶした。
「やったあ！」
ステイシーが叫んだ。
「玉袋が体のなかにめりこんでる！」

ジョンは、顔を苦痛に歪めていた。目に涙が溢れ、いまにも倒れそうだった。
キャシーは愉悦に満ちた表情で、のめりこんでいた陰嚢が再び落ちてくるのを見つめていた。
ジョンの陰嚢はどす黒く変色していた。
「あらあら」
ステイシーが嬉しそうに言った。
「玉袋が倍に腫れあがってるわ」
ジョンは、彼の睾丸が完膚なきまでに叩きのめされたことを知った。凄まじき激痛だった。内出血した血が陰嚢じゅうに溢れていた。睾丸が急速に冷えはじめた。おそらく壊死してしまったに違いない。
少女たちは興奮した。睾丸が小さなメロンほどの大きさにまで腫れ上がり、玉袋は彼の股から二十センチばかりも下まで垂れ下がっていた。
キャシーが言った。
「ジョン、あんたの負けね」
ジョンは、もごもごと「た、たすけてくれ……」と呻いていた。彼のペニスの先端から血の混じった赤い精液が垂れていた。
「あんたは負けたのよ」
キャシーは冷たく言い放った。

「この、ろくでなし！」
彼女は、もう一度、瀕死の睾丸を蹴りあげた。ジョンは悲鳴をあげて倒れた。床を這いながら、ドアに向かってあがいた。それに合わせて、膨れ上がった陰嚢がよたよたと移動した。
キャシーは、彼の背中を踏みつけた。そして、左足で彼の尻を押さえつけ、右足の踵を、彼の右の睾丸に乗せた。
「鋼鉄の金玉だって？　笑わせるんじゃないわ！」
彼女は、全体重を踵に乗せた。ぐしゃっという音につづいて、ジョンの絶望的な絶叫が響いた。彼は失神した。
ステイシーが駆け寄った。
「もう一個は、私にやらせて」
キャシーは快く、左の睾丸を彼女に譲った。ステイシーは、残った睾丸をぎゅっとひねりあげた。キャシーは、マッシュポテトのようになった、かつてのジョンの男性のシンボルを弄びながら訊ねた。
「用意はいい？」
「いいよ。やっちゃおう」
ステイシーは答えた。
「ほんと……こればっかりは、やめられないわ」

ステイシーは全身の力をこめて、睾丸を握り潰した。彼女の手のなかで、薄皮に包まれた精巣が行き場を求めて右往左往し、やがて、ぐしゃっという音とともに破裂した。もはや使い物にならなくなったジョンのペニスから、またも血に染まった精液が迸った。

ステイシーのプッシーはぐしょぐしょに濡れていた。

「今月は、これで十四個めよ！」

キャシーが言った。

「女に生まれてよかった！　そう思わない、ステイシー？」

返事はなかった。

「……ステイシー？」

見ると、すでにステイシーはトイレに駆け込み、激しくオナニーをしていた。キャシーは、すでに男性でなくなったズタボロの肉体を見やり、頭を振って微笑んだ。

「気持ちはわかるわ。ステイシー」